
 シンポジウム

論題 中世哲学におけるアリストテリズム

——存在論を中心に——

司会 九州大学 稲垣 良典

提題：アリストテレスにおける「存在」と「一」

慶応大学 牛田 徳子

提題：トマス・アクィナスの「在るもの」と「一」

との置換 (conversio) 説

京都大学 山本 耕平

(於 九州大学 1985. 11. 17)

司会

稲垣 良典

この主題については、中世哲学会でとりあげる総合的研究討論の主題としてはむしろ陳腐ではないか、との感じを抱く人がいるかもしれない。中世のスコラ学者にとってアリストテレスは「哲学者」であったのではないか。中世哲学からアリストテレスを取り去ったら何が残るのか、と問い返したくなる人もあろう。さらに、中世哲学は要するに「質の低下したアリストテリズムのたぐい——アリストテレス自身もっていた独創的で創造的な生気を欠き、些末で面倒な問題に熱中した」(コブルストン『中世哲学史』序論)と確信している人もあるかもしれない。「中世哲学におけるプラトニズム」なら新しい問題提起として意味があるかもしれないが、「中世哲学におけるアリストテリズム」という主題からは何らの実りある討論も知的刺激も期待できない、と感じる人が多いかも知れない。

他方、「アリストテリズム」という言葉の多義性が大いに問題になりうるであろう。

「アリストテリスム」と呼ばれるのは、アリストテレスその人の哲学から、その影響の周辺・末端にいたるまで、様々の段階と種類を包括している。しかし、何より問題なのは「教説」*doctrina* としての「アリストテリスム」がある、という考え自体であろう。アクリルによると「アリストテレスの哲学を教説の集合体として説明することは、大へんな誤解の種」であり、「この思い違いは、古代や中世の《アリストテレス主義者》と呼ばれたある人々の態度と信念に由来する」（『哲学者アリストテレス』藤沢・山口訳、10、12ページ）。

たしかにアクリルの言うとおり、スコラ学者たちにおいてアリストテレスは「教える者」としての権威を認められ、したがってその「教え」*doctrina* の存在も疑われていなかった。スコラ学者はそうした「教え」を前提した上で、その「真意」*intentio* を探ろうとしたのである。しかし他方、トマス、スコトゥス、オッカムなどの著作を読むと、かれらがアリストテレスの「教え」を完成されたものとも最終的なものとも見なしなかったことはあきらかである。じっさいに、形而上学や知識論、倫理学および論理学の領域において、これらのスコラ学者たちはアリストテレスから多くを学びつつ、諸々の根本問題に関して独自の探求を推し進めた。そのような探求と成果は、或る意味では「アリストテリスム」と呼ぶこともできるが、より本来的にはかれら自身の哲学と見なすべきであろう。

このように見てくると、「中世哲学におけるアリストテリスム」とは、中世におけるアリストテレスの哲学的教説の受容、その理解および誤解の歴史を指すものではなく、むしろ、アリストテレスの著作との出会いを通じて可能となった中世スコラ学者における哲学的探求、を指すものと解した方が適当であり、またその場合に、この主題をめぐる研究と討論から何らかの成果を期待できるであろう。

わたくし自身、このシンポジウムの主題を提案した一人であるが、その際とくに頭にあったのは、最近14世紀スコラ学の研究が急速に進展したのにもなって、この時期におけるアリストテリスムをめぐる問題があらたに提起されていることと共に、わが国の中世哲学会会員のなかには優れたアリストテレス研究者が多いので、その積極的な参加をえて、国際的に見て特色があり、また水準の高い中世哲学研究をめざさなければならない、ということであった。この一連のシンポジウムに誘発されて中世哲学におけるアリストテリスムに関して独創的な研究が生れることを期待せずにはいられない。

今回は「存在」と「一」という存在論の基本問題に即して主題への接近が試みられたが、提題者の報告においてあきらかに読みとられるごとく、アリストテレスとトマスは「存在と置き換えられる一」について語る点において同じ道を歩いているように見えながら、両者における「存在」理解に認められる著しい相違のゆえに、「一」についての理解にも微妙ながら重大な違いが見出される。その相違点を牛田氏は明確に指摘し、山本氏はそのような相違の根底にあるトマス独自の存在理解にふれている。そのことを第一回のシンポジウムの成果として評価したい。

提題 アリストテレスにおける「^{オン}存在」と「^{ヘン}一」

牛田 徳子

以下において、(一)、アリストテレスの「存在」と「一」の概念（以下オン、ヘンと記す）について行なった報告を要約し、(二)、アリストテレス（以下 Ar）の理解を前提したならば、トマス（以下 Th）の超越概念論がどのように解釈されうるかを論じた二回目の報告を要約し、最後に (三)、私が提起した問題と会場の内外から寄せられた問題の若干のものに触れることにしたい。

(一)、紙幅の関係上、Ar のもっとも基本的な四つのテキストをあげ、短いコメントを加えるにとどめる。

(1) 「オンとヘンが同じであり、一つの本性^{ビュシス}であるのは、それらが互いに随伴する点にあるのであって……一つのロゴス（ラチオ）で表わされるからではない」（*Met* Γ2. 1003 b 22-1）。両者の論理的相互随伴性は外延が等しいことである。しかし意味論的には両者はそれら自体が同じ対象を表示するわけではない。たとえば、或るものを指して「それは一人の人間だ」と言おうと、「それは有る人間だ」と言おうと、「それは人間だ」と言う場合となにも違ったことを言っているわけではない。両者は任意の通常の語に付加されたり、付随するとき、その通常の語が表示すると同じものを表示することで互いに等値な語なのである（cf. *ibid* b26-32, I 2. 1054a 16-19）。

(2) 「(A) どのようなものが一つと言われるか、という問題と、(B) 一つであることとは何であるか、ヘンのロゴスは何であるか、という問題が同じ仕方で語られると取ってはな